

## ニカラグア日本語教育の現状と問題 —中米各国の日本語教育事情を踏まえて—

窪 寿恵

### 要 旨

中米大学人文学部言語センターは、ニカラグア唯一の日本語教育機関であり、20年余り日本語教育が行われている。しかし、ニカラグア人教師がいないという現状で、今後日本語講座の運営をどのように継続していくべきかという問題がある。また、現在日本人教師1名で日本語講座とそれに関連する業務全てを担っており負担も大きい。そのため、早期にニカラグア人教師を養成しニカラグア人教師が主体となりニカラグアの日本語教育を担っていく必要がある。また、ニカラグアでは日本語の必要性は非常に低く、学習者の学習目的や要望も様々であるため、中米大学の現在のカリキュラムのみで日本語教育を行うのには問題があり、カリキュラム改正が必要であると考え。そして最終的には、ニカラグアだけではなく中米全体の日本語教育のために、中米各国の日本語教師との連携を深め中米全体の日本語教育を発展させていく必要がある。

【キーワード】 ニカラグア、中米、現地人教師養成、カリキュラム、教師の負担

### 1. はじめに

ニカラグアが中米にあるということも多く日本人は知らないかもしれない。しかし、この日本から遠く離れた国で20年あまり日本語教育が行われ、日本語そして日本に関する関心が高まっていることは確かである。

筆者が日本語教育を行っていたのは、首都マナグアにある中米大学人文学部言語センターである。中米大学人文学部言語センターは、ニカラグア唯一の日本語教育機関である。1986年に在ニカラグア日本国大使館がニカラグア初の日本語講座を中米大学外国語学部を設置し、翌年より活動が開始される。1995年に日本語講座の運営は大使館より青年海外協力隊<sup>1)</sup>(以下、協力隊)へ移行され、1996年の学部改組により言語センターが外国語学部から人文学部に変更される。日本語講座は、開講以来一貫して学外開放の公開講座として開講され、現在に至っている<sup>2)</sup>。

1) 青年海外協力隊はJICA (Japan International Cooperation Agency: 独立行政法人国際協力機構)が行うボランティア事業である。

2) 中米大学日本語事務所過去資料及び国際交流基金ホームページ (<http://www.jpfi.go.jp/j/japanese/survey/country/2009/nicaragua.html>) 「日本語教育国別情報」の「ニカラグア」(「2006年海外日本語教育機関調査」に基づく)を参照。

## 2. 日本語教育の現状

中米大学は私立大学ということ、そして日本語講座は公開講座であるため、1コース(50時間)が40ドルとニカラグア人にとっては高額な受講料を払わなければならない<sup>3)</sup>。ただし、中米大学の英語講座は1コース100ドル程度かかるため、それと比較すれば高いとは言えない。その理由としては、唯一在籍している日本語教師が協力隊教師であるため教師への報酬を払う必要がないためだと考えられる。言語センターでは他にもドイツ語、イタリア語、フランス語、そして外国語母語話者のためのスペイン語講座が開講されており、ドイツ語に関してはドイツからのボランティア教師、そしてニカラグア人ドイツ語教師もおり、日本語より学習者数も多い。しかしながら、言語センターは英語教育に最も力を入れており、他の外国語学習者数は多くはない。日本語教育に関しては、唯一の日本語教師が協力隊教師であり、ニカラグア人教師がいないという現状で、今後日本語講座の運営をどのように継続していくべきかという課題がある。

### 2.1 カリキュラム

主教材として『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ』を使用し、それを全部で12レベルに分け学習を行っている。1年間のコース数は平日クラスで7コース、土曜日クラスで5コース開講され、全12レベルを修了するには、平日クラスで2年弱、土曜日クラスで2年半ほどかかることとなる。平日クラスは1クラス2時間で月曜日から木曜日(金曜日)まで異なるレベルで2クラス、土曜日クラスは毎週土曜日5時間を1クラス行い、多くて3クラス開講することになる<sup>4)</sup>。このように平日クラスはほぼ毎日行われる集中クラスとなっている。中級レベル以降のコースは開講されておらず、日本語学習は初級レベルで終了となる。

大学には日本語を学習したことのあるスタッフはおらず、日本語がどのような言語であるかよく理解されておらず、日本語教師に全て任されているため、12レベル修了が初級レベル(日本語能力試験3級レベル)であることについては問題とされてはいない。英語講座に関しては12レベル修了で上級まで学習できるカリキュラムになっているため、日本語も12レベルまで設定してあるということのみである。

大学側は上級レベルと考えて日本語講座を12レベルまで設定しているが、実際は初級レベルである。しかし、第3節で述べるが、他の中米各国と比較すると、内容や進度の点では高いレベル設定となっている。ニカラグアの日本語教育のレベルは、日本の日本語教育と比較した場合は初級レベルの日本語教育ではあるが、中米各国の日本語教育と比較した

3) 2009年12月25日現在のニカラグア中央銀行統計(<http://www.bcn.gob.ni>)によると2009年1月から10月のニカラグア国民の平均月収は5,975.2コルドバである。ニカラグアの銀行Bancentroの2009年8月28日の為替レートが1ドル=20.37コルドバであるため、およそ293ドルがニカラグア国民の平均月収となる。

4) 平日クラス年間7コース中最初の5コースまでは月曜日から木曜日の週4日(最終週は週5日)、6週間で終了し、後半の2コースは月曜日から金曜日の週5日、5週間で終了する。また、赴任後すぐレベル9から開講した土曜日クラスは学習者がレベル12まで修了した時点で、新しいクラスは開講しなかった。1コース50時間の時間数に関しては、50分を1時間とみなし計算する。土曜日クラスは授業の合間に休憩時間を入れ、1回5時間、9週間で50時間としている。

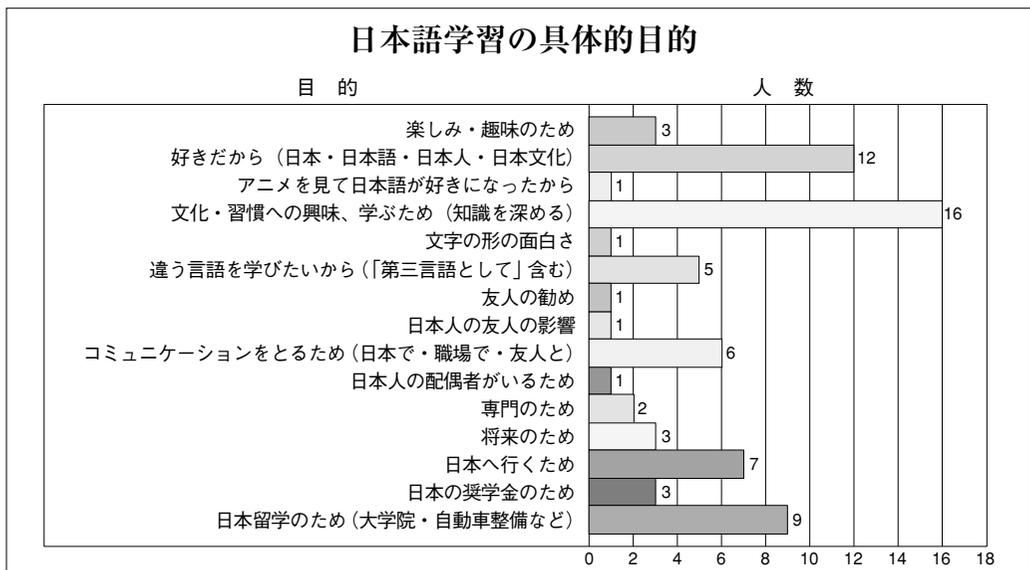
場合は高いレベルということである。このように中米の日本語教育レベルに関しては、日本国内の日本語教育レベルと比較することはできない。

ニカラグアでは日本語の必要性は非常に低く、また中米各国の日本語教育レベルと比較しても現在のレベル設定で日本語教育を行う必要があるのかは疑問であり、カリキュラム改正が必要なのではないかと考える。

## 2.2 学習者の学習目的

2007年9月に協力隊教師としてニカラグアに派遣され、1か月の語学研修後11月より中米大学で授業を行った。2007年9月より短期隊員<sup>5)</sup>教師によりレベル1から平日クラスが開講されており、筆者は11月より既に帰国していた前任者担当の学習者を土曜日クラス、レベル9から担当することとなった。

以下は、クラス開講時に学習者に実施したアンケートの学習目的をまとめたグラフである。2007年9月から学習を始めたレベル1の学習者16名(レベル1から3まで短期隊員教師担当)、2007年10月よりレベル9から学習を再開した学習者7名(11月第1週まで短期隊員教師担当)、2008年1月から1コースのみ開講したレベル9の復習クラスの学習者3名、そして2008年5月から学習を始めたレベル1の学習者14名、計40名への調査結果である。アンケート協力者に関しては、当日出席がなくアンケートに回答できなかつたり、数日は出席したもののそのレベルを終了せずに来なくなつたりした学習者などもある。



グラフ1 日本語学習の具体的目的

<sup>5)</sup> 短期隊員とは「青年海外協力隊短期ボランティア・シニア海外ボランティア短期ボランティア」のことである。年齢により青年海外協力隊とシニア海外ボランティアとに分かれ、派遣期間は原則1か月から10か月(最長1年未満)となっている。(http://www.jica.go.jp/activities/short/outline/index.html 参照。)本報告では、「青年海外協力隊短期ボランティア」を意味する。

アンケートの回答は記述式を筆者が分類したものであり、結果的に複数項目に分類された回答もある。なお、回答のスペイン語を筆者が和訳した。学習者の具体的な目的を見ると、「文化・習慣への興味、学ぶため」が16名で一番多く、その次は「好きだから」が12名となっている。これらは学習者の嗜好によるものである。1名のみ「アニメを見て日本語が好きになったから」と日本文化について具体的に回答している学習者がいる。アンケートでは日本文化について具体的に記述している学習者はこの1名だけだったが、世界的な人気の日本のアニメや漫画などのサブカルチャーから日本語に関心を持つ学習者も多く見られた。

そして、その次に多かったのが9名で「日本留学のため」という回答である。ニカラグアの平均月収は300ドルほどであるため、日本への留学は費用の面で難しいと考えられるが、日本へ行って勉強したいという学習者も多いことがわかる。ニカラグアでは日本の文部科学省の奨学金が大使館推薦により年に2名もらえることになっている。学部入学では、日本語を含む学科試験を受けなければならない、基礎学力や日本語能力の問題もあり奨学金を得ることは難しいようである。「2009年度日本政府（文部科学省）奨学金留学生募集要項 研究留学生」の「5. 選考及び結果通知」に「(2) 筆記試験は、日本語及び英語とする。なお、日本語の試験は全員が受験することとし、英語は希望者のみを対象とする。」とある。しかし、「(3) 各選考に当たっての審査方針は以下のとおりである。」として、「②筆記試験：日本語又は英語のいずれか一方で一定以上の成績であること。」とある。つまり、大学院入学であれば、英語の試験は任意であるが、英語の成績が一定以上あれば、奨学金が得られる可能性が出てくるということである。このように大学院入学の場合、奨学金獲得に日本語能力は必ずしも必要ではないが、本当に日本へ行きたいと考えている学習者は日本へ行く準備として日本語を習っておいたほうが良いと考えているようである。

以下の表1は、グラフ1の「日本語学習の具体的目的」を便宜的に大別したものである。それをグラフにしたものがグラフ2である。

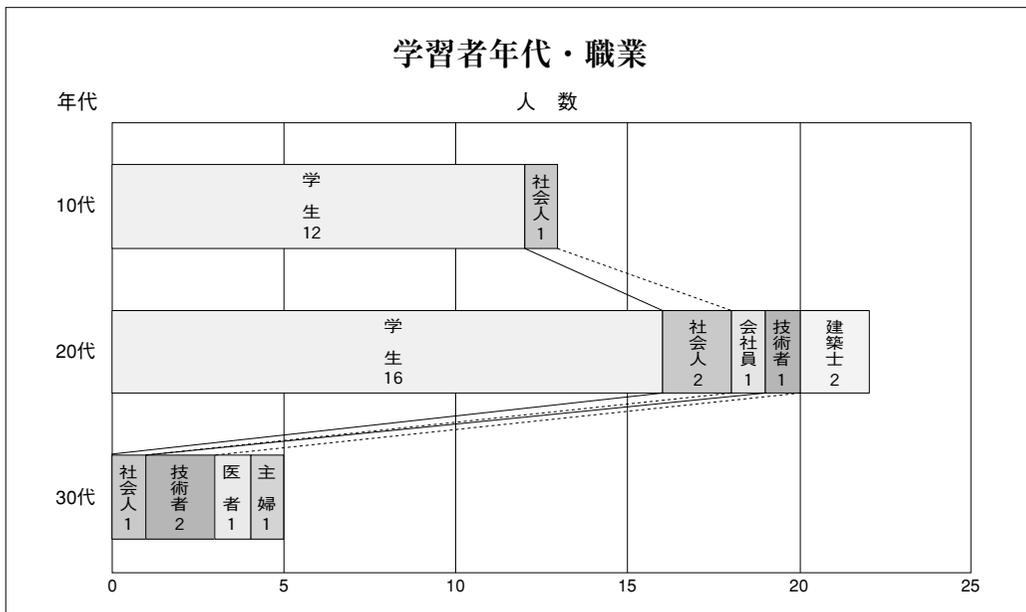
表1 日本語学習の目的大別

目的大別	人数	日本語学習の具体的目的	人数
心的理由	32	楽しみ・趣味のため	3
		好きだから(日本・日本語・日本人・日本文化)	12
		アニメを見て日本語が好きになったから	1
		文化・習慣への興味、学ぶため(知識を深める)	16
言語的・学習的理由	6	文字の形の面白さ	1
		違う言語を学びたいから(「第三言語として」含む)	5
人的理由	9	友人の勧め	1
		日本人の友人の影響	1
		コミュニケーションをとるため(日本で・職場で・友人と)	6
		日本人の配偶者がいるため	1



表2 学習者年代・職業

年代	職 業							合計
	学生	社会人	会社員	技術者	建築士	医者	主婦	
10代	12	1						13
20代	16	2	1	1	2			22
30代		1		2		1	1	5
合計	28	4	1	3	2	1	1	40



グラフ3 学習者年代・職業

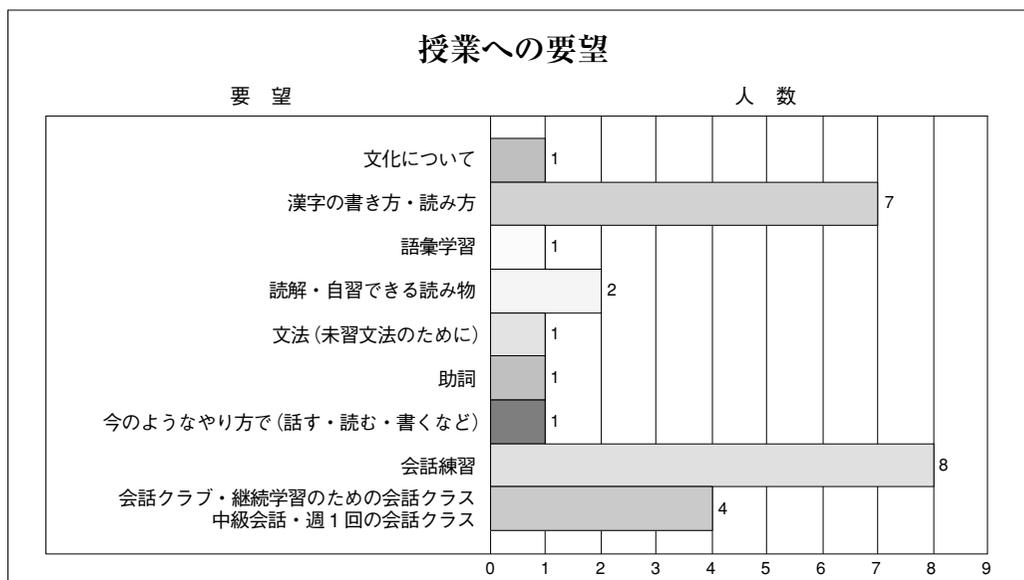
アンケートに回答してくれた学習者の年代は20代が最も多く22名、職業は学生が28名で最も多い。社会人は12名、30%とあまり多くはないが、技術者や建築士、医師などある程度経済的に余裕があり、高等教育を受けている学習者が多い。大学生や高校生などの学生でも、1コース40ドルの受講料が払える経済的余裕のある学習者が多かった。そういったことを考えるとニカラグアではある程度経済的余裕のある人しか日本語学習ができないということになる。そして、経済的な余裕があるため実益があるわけではない日本語を趣味として学ぶ学習者が多いということでもあろう。

### 2.3 学習者の授業への要望

レベル12まで修了した学習者に対して授業に対する改善点を確認するため、学習者の授業への要望についてアンケート調査を実施した。「日本語が上手になるようにどんな授業を

したかったか。」「授業でどんなことを勉強したかったか。」という質問をした。このアンケートも記述式であったため、一部の回答が複数に分類されている。以下のグラフは、それを筆者が翻訳しまとめたものである。

調査協力者はレベル9からレベル12まで担当した6名(2008年7月修了)、レベル4からレベル12まで担当した4名(2009年5月修了)、そして、レベル1からレベル11の途中まで担当した9名(内1名はアンケート回答なし・2009年10月アンケート実施)<sup>6)</sup>、計18名である。



グラフ4 授業への要望

グラフ4を見ると、「会話練習」が8名、「会話クラブ・継続学習のための会話クラス・中級会話・週1回の会話クラス」が4名、計12名と会話に関する要望が多いことがわかる。使用していたテキスト『みんなの日本語』は学習する文法項目や語彙数が多く、それを学習するためには会話を練習する時間があまりとれなかったということがこの要望に結びついたと考える。また、学習者には『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ』を終了しても日本語能力試験の3級レベルである旨伝えていたため、中級クラス開講の要望(「文法(未習文法のために)」「継続学習のための会話クラス」「中級会話」)もあったと考える。

そして、2番目に多い要望が「漢字の書き方・読み方」の7名である。日本語を勉強すればするほど、漢字の理解が重要であると感じるようである。また、非漢字圏の学習者は漢字の形や意味などに関心を持っている学習者も多いため、要望が多く出たと考えられる。

少数ではあるが「読解」や「文法」などの要望もあり、全ての学習者の要望に叶う授業を

<sup>6)</sup> 短帰国時にレベル12まで修了しなかったため、レベル11の途中ではあったがアンケートに答えてもらった。

行うことの難しさを感じた。

### 3. 中米各国とニカラグアの日本語教育との比較

2009年8月21日(金)から23日(日)にかけて、コスタリカにて第1回中米日本語教育セミナーが開催された。エルサルバドル、グアテマラ、コスタリカ、ドミニカ共和国、ホンジュラス、そしてニカラグアの6カ国、計33名の日本語教師が参加して、各国の日本語教育事情について報告があり、中米の日本語教育のための組織づくりを行った。

表3はセミナー開催時の資料及び口頭発表の内容をまとめたものである。そのため内容はセミナー開催時までのものである。

表3 中米6カ国の日本語教育事情<sup>7)</sup>

国名 日本語教育年数	日本語教育機関	教師数	学習者数
エルサルバドル 14年	エルサルバドル国立大学 ・単位制コース *『みんなの日本語Ⅰ』 ・一般開講コース *『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ』 *全8レベル *レベル7の「Medio SuperiorⅠ」で『みんなの日本語Ⅰ』まで終了	JOCV <sup>8)</sup> 2名 現地人教師2名 (ボランティア)	129名
	CENIUES ・『みんなの日本語Ⅰ』 ・現在レベル2・3・6の3コース開講中	現地教師3名	48名
	Berlitz ・『みんなの日本語Ⅰ』 ・現在レベル2・4の2コース開講中	現地教師1名	5名
グアテマラ 17年	国立サンカルロス大学 ・一般講座的講座 ・13歳～50歳ぐらい ・4学期制(1学期に3課ずつ) ・全17レベルで『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ』終了 ・約4時間/週	JOCV 1名 現地人教師3名 ・1名:カウンターパート、大学職員、ポルトガル語教師 ・1名:会社員、土曜日のみ 現地日本人教師1名	約220名

<sup>7)</sup> 内容はセミナー資料と口頭発表と異なるところもあったため、わかる範囲でまとめた。

<sup>8)</sup> JOCVは「Japan Overseas Cooperation Volunteers」の略でJICAが行う「海外青年協力隊」を意味する。

コスタリカ 35年	国立コスタリカ大学本校 ・単位制3レベル (現在学習者希望により+1レベル)	JOCV 1名	94名
	・一般公開講座4レベル(土曜日) (現在レベル4)	現地人教師2名 (土曜日担当)	10名
	国立コスタリカ大学オクシデンテ校 ・単位制2レベル (現在学習者の希望により+1レベル)	JOCV 1名	64名
	・一般公開講座2レベル(木曜日) (現在レベル2)		10名
	国立ナショナル大学 ・単位制4レベル	JOCV 1名	60名
	文化センター ・『にほんご1・2・3』 ・初級、中級、上級①～③、会話	現地日本人教師2名 日・コハーフ教師1名	95名
	コレヒオグランエスペランサ(幼小中高)	—	約100名
	TEC(カルタゴ工科大学) ・一般社会人向け講座4クラス ・『新日本語の基礎』	—	約40名
	ジオス ・15歳～38歳まで ・初級5クラス・中級1クラス ・『みんなの日本語』『新日本語の中級』	—	34名
	* どの機関も基本的には初級で修了。中級は文化センター・ジオスのみ。 * 日本語教師数は全教育機関で計16名		
ドミニカ共和国 日系：35年 その他：17年	私立アベック大学運営語学学校 ・現在4コース開講 ・3ヶ月で学期が終了	JOCV 1名	34名
	日本ドミニカ文化センター日本語学校 ・毎週土曜日3時間×2クラス開講 ・『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ』 ・18ドル/月 ・14歳～50歳	日本人教師4名 (内2名日系人教師) 現地人教師3名	199名
	ドミニカ共和国日系日本語学校 ・学習者：日系移住者子弟(6～18歳) ・全8校	17名	117名

ニカラグア 22年	<ul style="list-style-type: none"> <li>中米大学</li> <li>・全12レベル</li> <li>・平日：100分／日×4日(5日)／週×6週間(5週間) = 50時間／コース</li> <li>土曜日：5時間／週×9週 = 50時間／コース</li> <li>・平日クラス2年弱、土曜日クラス2年半ほどで修了</li> <li>・『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ』</li> <li>・40ドル／コース</li> </ul>	JOCV 1名	8名
ホンジュラス 1970～1997：27年 2005～2009：4年	<ul style="list-style-type: none"> <li>テグシガルパ国立教育大学</li> <li>・単位制2レベル (レベル1のみ単位認定)</li> <li>・『みんなの日本語Ⅰ』12課まで</li> </ul>	JOCV 2名 現地人教師1名	23名
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大使館主催クラス4レベル</li> <li>・『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ』50課まで</li> </ul>		132名
	<ul style="list-style-type: none"> <li>サン・ペドロ・スーラ国立教育大学</li> <li>・単位制3レベル</li> <li>・『みんなの日本語Ⅰ』21課まで</li> </ul>	SV <sup>9)</sup> 1名	38名
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・領事館クラス(1クラス)</li> </ul>		25名
	<ul style="list-style-type: none"> <li>サン・ペドロ・スーラ国立自治大学</li> <li>・初級A・B</li> <li>・『みんなの日本語Ⅰ』25課まで</li> </ul>	現地人教師2名 韓国人教師1名	50名

全体的に主教材として『みんなの日本語』を使用している日本語教育機関が多い。しかし、『みんなの日本語Ⅰ』のみ、または、『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ』まで学習しても修了までに4年程かかるところが多かった。『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ』の必要なところのみを学習している機関もあったが、『みんなの日本語Ⅱ』の前半くらいまでを学習するということがあった。また、1週間の授業日数も1日や2日といった機関が多く、ニカラグアの中米大学のようにほとんど毎日授業があり、2年ほどで『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ』が修了する機関はなかった。

学習者の日本語学習に関する取り組みについては、日本語講座に受講料を払って学習している学習者はやはり熱心であるという機関が多く、大学の単位制の場合は単位取得のための学習者と日本に関心のある学習者が半分ずつくらいであるという機関もあった。また、日系日本語学校の場合は両親の勧めで通う子供たちも多く、モチベーションが低いことが問題であるということであった。そして、ホンジュラスのサン・ペドロ・スーラ国立自治大学では韓国人教師が日本語を教えていた。理由としては、最初韓国語を教えていたのだ

<sup>9)</sup> SVは「Senior Volunteers」の略で、JICAが行う「シニア海外ボランティア」を意味する。

が、学習者が少なかったため日本語を教えることにしたそうである。すると学習者が増えたためそのまま現在まで日本語を教えているということであった。しかし、教師が日本人でないという理由から来なくなる学習者もいるという問題があるということであった。

中米の日本語教育に共通する問題としては、教師不足があげられた。日本人日本語教師はもちろん現地人日本語教師も不足しており、それに関連して教師としての知識不足という問題点もあげられた。この点に関しては国際交流基金の巡回指導を頼むのはどうかという提案が出た。また、現地人教師がいた場合でも、ボランティアであったり、生活するには不十分な収入しか得られなかったりという問題もあった。また、どの教育機関でも中級以降の日本語教育はあまり行われていない。それは、やはり日本語の必要性が低いということが原因であると考えられる。

ただ、比較するとわかるように、ニカラグアの問題は各国と比べると非常に大きいように思われる。まず、日本語学習者数が少ないことである。これは、各国の教育機関の多くが各レベル週に2回程度と授業回数が少なく、そのため複数レベル開講できたり、または単位制であるため大学生の学習希望者が無料で受講できたりすること、そして有料の一般公開講座であったとしても比較的安い受講料で受講できる点が理由としてあげられる。中米大学の公開講座はドミニカ共和国のアベック大学の日本語講座と類似している。アベック大学では各レベル毎週2回で、4レベル開講しているため34名の学習者がいるが、各レベルの人数は平均8.5名になる。中米大学はセミナー時1レベルのみの開講で8名<sup>10)</sup>であるから人数的には似たような状況だと考えられる。そして、アベック大学の問題点は継続して教えられる教師がいらないため講座閉鎖の可能性があるということであった。中米大学でも現地人日本語教師がいらないという点は長年の懸案事項である。そのため、学習者数が少なく現地人教師不在という状況のアベック大学と同じように今後ニカラグアの日本語講座も閉鎖される可能性が出てくるかもしれない。

このように第1回中米日本語教育セミナーでは、中米各国の日本語教育の現状を把握し、問題点を共有することで、中米の日本語教育を発展させるための組織づくりを行った。組織名は「中米カリブ日本語教育ネットワーク」とし、毎年セミナーを開催し、最終的には中米日本語弁論大会を開催することなどを目標とする提言書を後日コスタリカ教師たちにより在コスタリカ日本国大使館に提出した。

#### 4. 日本語教育の問題点

派遣当初からカリキュラム改正の必要性を感じ、ニカラグア人日本語教師不在という状況についても問題であると感じていた。そのため、着任後2年経ち帰国前となってしまったが、2009年8月に「新カリキュラム提案書」を、2009年9月に「日本語教師養成提案書」を大学に提出し、2009年9月と10月にJICAの担当者も交えて大学との話し合いを実施した。

<sup>10)</sup> セミナー時には8名であったが、その後過去の受講者が試験を受けて再受講を始め帰国時には9名となった。

#### 4.1 カリキュラム

「2.2 学習者の学習目的」からわかるように、ニカラグアでは日本や日本文化への興味やあこがれというような「心的理由」で日本語学習を始める学習者が多い。また、「2.3 学習者の授業への要望」でも、「会話」中心のクラスの要望が多かった。そして、「3. 中米各国とニカラグアの日本語教育との比較」で述べたようにニカラグアの日本語教育レベルは内容、進度ともに中米各国の日本語教育の中では高いと思われるが、ニカラグアでは実際に日本語を使用するような機会はあまりない。

しかし、「2.2 学習者の学習目的」では、留学など実際に日本に行ってみたいという「日本渡航的理由」から学習を始める学習者もいる。また、文部科学省の奨学金を受ける場合、大学院入学であれば基本的には日本語能力は問われないが、やはり留学するのであればある程度の日本語を学習しておいたほうが有利であることは確かである。そして、文部科学省の奨学金の他にも、国際交流基金の日本語学習者訪日研修の試験を受けて短期間日本へ行く機会や、特定非営利活動法人ジャパン・リターン・プログラムの日本語サミットに参加する機会などもある。その際にはやはり日本語能力試験3級程度というレベルが設けられている。学習者たちは日本へ行きたくても費用の面で行くことが難しく、日本に行くためには何かしらの奨学金をもらって行くしか方法がない。そのためにも中米大学では日本語能力試験3級レベルの日本語教育は必要であると感じている。

このように興味やあこがれから日本語での簡単なコミュニケーションを望む学習者には現在のカリキュラム内容は学習項目が多すぎ、必要ではないことも学習しなければならないという不満にもつながる。しかし、日本語能力試験3級レベルの日本語学習が必要な学習者もいるため、現在のカリキュラムの必要性もある。そのため、以下の表4のようにテキスト比較を行い、『はじめのいっぽ』を使用して、必要最低限の文法を使い日本語で簡単なコミュニケーションができるレベルを目標とする学習目的の異なった新カリキュラムの提案を行った。

表4 テキスト比較<sup>11)</sup>

	『みんなの日本語』			『はじめのいっぽ』
	I	II	計	
語彙数	約1,060 + 参考関連語彙約390 = 1,450	約900 + 参考関連語彙約290 = 1,190	約2,640	約400
文型数	79	73	152	約50

『はじめのいっぽ』の導入語彙は『みんなの日本語』の約6分の1以下、文型は約3分の1

<sup>11)</sup> 『みんなの日本語』の語彙数、文型数はスリーエーネットワークの『2009図書目録』を参照し、『はじめのいっぽ』の語彙数はテキストの目次を、文型数はテキストを参考にだいたいの数を出した。

である。動詞の活用に関しては、6フォーム未習となる。新カリキュラムでの授業は、現カリキュラムと区別するため、日本語講座名を「基礎日本語講座」とし、現カリキュラムは「集中日本語講座」とする。レベルは5レベル（各レベル3課ずつ）、1年（計250時間）で修了することとして提案書を提出した。

新カリキュラムでは、必要最低限の文法項目のみを学習することで、学習者の負担を減らし、日本語で簡単なコミュニケーションがとれることを目標とする。文字学習に関しても、平仮名、片仮名は学習するが、漢字に関しては学習者のペースに合わせて学習し、楽しみながら学習することを目標とする。

この新カリキュラムは週に1度しか授業のない土曜日クラスの学習者の学習負担を減らすために土曜日クラスのみで実施し、現在のカリキュラムは平日クラスで実施することとして提案した。ただし、実施に関しては後任の協力隊教師が行うこととなった。

## 4.2 現地人教師養成

中米大学での日本語教育は在ニカラグア日本国大使館が始めてから20年以上になるが、現在までニカラグア人日本語教師はおらず、協力隊教師のみが授業を行っている。しかし、この協力隊教師の派遣は永遠ではないため、派遣が終了しても、20年以上続いたニカラグアでの日本語教育の根が絶えないように、ニカラグア人日本語教師の養成が必要だと考える。また、教師が増えることで日本語講座数が増えれば、今まで1年以上新クラスの開講を待っていた人は、あまり待つことなく日本語に関する興味がある内に授業を受けることができるようになる。大学にとっても学習者数が増えれば経営的な利益を受けることとなる。このような理由により現地人教師養成は必要であると考えた。

派遣当初は、ある程度の日本語能力があるニカラグア人を探すために元日本留学生から候補者を探すことも試みたが、他に仕事を持っていたり、ニカラグアには戻ってきていなかったりとなかなか見つけることができなかった。また、中米大学の日本語講座修了生から探すことも試みて1名の候補者に日本語能力試験3級レベルの試験を実施したが、長年日本語学習から遠ざかっていたこともあり、3級レベルには達していないことがわかった。また、3級レベルで教師ができるのかという疑問もあったが、他の中米各国の日本語教師との情報交換により、他の国では3級レベルが修了していない現地人教師が日本語を教えている場合もあることを知った。そのような状況を考えれば、他の中米各国の日本語教育レベルと比較して内容、進度ともに高いと思われる中米大学の日本語講座受講生であれば、ニカラグア人日本語教師として日本語を教えることは可能ではないかと考えた。そこで受講生の中から優秀、かつ教師としての資質があり、また本人も教師として働きたいとの意向のある学習者を選定した。そして12レベル修了後、教師養成ができるよう中米大学に「日本語教師養成提案書」を提出した。

「3. 中米各国とニカラグアの日本語教育との比較」で述べたように、現地人教師がいる場合でも、ボランティアであったり、生活するには不十分な収入しか得られなかったりという問題が中米各国にあったため、「日本語教師養成提案書」を出す際にはJICAの担当者

も交えて話し合い、「給与に関して、他のニカラグア人教師と同じ基準を適用する」よう確認した。

帰国までに中米大学に日本語教師養成に関する提案までは行った。しかし、ニカラグア人教師の選定、JICA及び中米大学との話し合い、提案書作成などに時間がかかり、また受講生もレベル12まで修了に至らなかったこともあり、実際に教師養成に携わることはできず、教師養成に関しても後任の協力隊教師が実施することとなった。

### 4.3 教師の負担

ニカラグア唯一の日本語教育機関である中米大学では、協力隊教師1名のみで以下のよ  
うな全てのことを行わなければならない。

- 1) 日本語講座(週16時間～25時間)
- 2) 週に一度の日本文化教室の企画・運営・ニカラグア人ボランティアアシスタントへの助言
- 3) 国際文化親善フェスティバルの企画・運営・実施(年に一度)
- 4) スピーチコンテストのスピーチ準備・発表者への指導(年に一度)  
ニカラグア人ボランティアの日本文化に関する発表準備・指導<sup>12)</sup>
- 5) 修了式発表準備<sup>13)</sup>
- 6) 国際交流基金日本語学習者訪日研修試験準備(不定期)
- 7) 特定非営利活動法人ジャパン・リターン・プログラム日本語サミット参加申請準備  
(参加希望者がいた場合)

日本語講座に関しては試験が1年に平日クラス7コース×2クラス分、土曜日クラス5コース×1クラス分ある。小テストなども含めると試験作成や採点にも非常に時間がかかる。また、このような業務の他に派遣期間中カリキュラム改正や現地人教師養成に関する業務等も行った。

協力隊は派遣が2年と決まっているため時間がない。また、ニカラグアの生活や大学での授業のやり方に慣れるまでには時間を要する。今までの協力隊教師も教師養成などが必要だと考えていたと思うが、業務量が多すぎて実施までには至らなかったと考える。このような多忙な状況を考えると教師養成が終わるまでは協力隊教師2名体制をとったほうがいいのではないかと考える。

---

<sup>12)</sup> スピーチコンテスト開催前に日本文化紹介も行う。運営は日本国大使館が主体であるが、日本文化紹介の際に、中米大学の日本文化教室で活動を行っているニカラグア人ボランティアアシスタントが日本文化についての発表を行うことが恒例となっている。

<sup>13)</sup> レベル12まで修了した学習者の修了式で、日本語を使って学習成果を発表することになっている。派遣中は2度修了式を行った。

## 5. 終わりに

ニカラグアは日本から遠い国であり、日本語の需要は多いとは言えない。しかし、そのような状況でも日本や日本人、日本の文化に関心を持ち日本語を学ぼうとする学習者がいることも確かである。ニカラグアで日本語は一部の教育を受けた、ある程度生活に余裕のある人が学ぶ言語となっている。しかし、今後ニカラグア人日本語教師が養成され、ニカラグア人教師が増えることで、日本語が学びたい人が学べる言語になることを願っている。

## 参考文献

酒井順子 (1997) 「南米における日本語教育の現状と問題点—1996年度ポルトガル語圏並びにスペイン語圏日本語教育巡回セミナー講師を経験して—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』 23

佐藤友則 (1998) 「韓国および台湾の日本語学習者のニーズ調査」『東北大学言語科学論集』 第2号

峯正志・長野ゆり (2004) 「日本語教育に関するニーズ調査結果」『金沢大学留学生センター紀要』 第7号

山本もと子 (2000) 「イギリスの公教育における日本語教育」『信州大学留学生センター紀要』 第1号

若林秀明 (1999) 「オーストラリアの大学におけるニーズ分析」『世界の日本語教育』 9